
インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

学生逃避

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

【Zコード】

Z6264Y

【作者名】

学生逃避

【あらすじ】

ISを使えることから、半ば強制的に入学させられた男、織斑一夏。幼馴染の篠ノ乃箒と再会し、数ヶ月が立ち四組に転入生が来るというニュースが舞い込んできた。その転入生は一夏や箒がよく知る人物だった。

処女作品なので、下手です。それでもよろしかつたら、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

短いですがよろしくお願ひします！！

プロローグ

インフィニットストラトス、通称IS。現在存在している兵器をはるかに超える戦闘能力を誇る。

しかし、これには一つ欠点がある。

それは、女性にしか使えないこと。

これにより世界は、女尊男卑が当たり前の世界に変わった。

そして、ある男もISによって変わったのだ。

？？？視点

「本当にいいんだな」

「ああ、構わないさ」

俺は、目の前にいる男にそう言つて、男は心配そつた表情をしながら椅子に座る。

「なら良いんだが、あいつらは納得しないぞ。今も騒いでるんじ

「やないか？」

確かに納得しないだろうが、もう決めたことだ。変えるつもりはないし、それに最後にはわかつてくれるはずだ。

……多分、……おそれく、……うん。

「まあ、あいつらのことをだから襲つてでも止めに来ると思うが、私が話しておひつ。行つて来い」

そして、俺は向かう。場所は……

プロローグ（後書き）

短い！！

短すぎますね（泣）

ですが、今後ともよろしくお願いします。

1 真（前書き）

連続投稿です。少しばかり話を作っているので早く出せればいいな、と思っています。

では、よろしくお願いします。

男はある建物の前にいた。そこはIS学園。しかし、ISは女性にしか使えないため必然と女子校となっていたのだが、あるニュースが世界に配信された。世界で唯一IS使える男が現れた。その男の名は、織斑一夏。しかし、今此処に三人目の男が学園の門を潜る。

一方、世界で初めてISを動かした一夏は自分の姉であり、担任である織斑千冬の授業を受け終えていた。授業内容は、二組とのISの実戦訓練。そして今はIS訓練機の片づけをしていた。

一 夏視点

「ふう、これで終わりですか？山田先生？」

「はい、お疲れ様です。織斑君」

俺に労いの言葉を言つてるのは、一組の副担任の山田先生。いつもあわただしく子供っぽい先生だが今回の訓練で国家代表候補生を一人同時に倒してしまった実力を持つ人。戦闘のときのように普段もしつかりしてればイイのに、神様もひどいよな。

「織斑君? どうしましたか?」

「いいえ! 何にも!」

いけねな。山田先生が心配して顔を覗き込んで来て、その際に豊満な胸が揺れるわけで。

「お、織斑君! お、男の子だから仕方ないかもせんけど。あまり見ないでほしいんですけど」

「あーその~。す、すみません」

そして、気まずい空氣と沈黙が漂つ。まづい、話題を変えなれば!

「そう言えば、朝にほかの組にも転入生がいるって話があつてんで
すけど、先生は何か知りませんか？」

「あ、はい。確かに四組に転入生が来るということなんんですけど -
-」

「ですけど？」

「まだ来てないんですよ。連絡もなくて」

不安そうな顔をしながら『う山田先生。確かに心配だな。

「でも、織斑先生は『あいつのことだから心配しても無駄だ』なん
て言つているんですよ」

千冬姉がそんなことを。それに『あいつ』って一体？

「山田先生」

「あ、織斑先生。どうしたんですか？」

なんてことを考えていたら千冬姉が現れた。いつの間にいたんだ。

「例の転入生が来たんでな、私がそいつの世話をしなければならないんだ。だから、午後の授業は私の代わりに頼みたいんだが」

「あ、やっと来たんですか！いやー心配してたんですよ

「千冬姉転入生つい - - -」

スパ――ン――

「織斑先生だ、バカ者」

清々しいぐらいの叩き方ですけど千冬姉、今何万もの脳細胞が死んだぞ。少しば加減をしてほしいぜ。

「何やつているんですか、千冬さん」

ふと千冬姉の後ろから男の声が聞こえた。え、男？

「お、織斑先生。後ろにこいる男の子は一体？」

「こいつが、転入生だ」

「「え？」」

「はい、そうです」

そう言った男は黒髪が目を隠すぐらいの長さで、身長は俺よりも少し低いぐらいで華奢な体つきをしていて。そして、なんだか懐かしい感じがする。

「久しぶりだな、一夏」

「え、何で俺の名前を？」

「何だ、忘れたのか？薄情な奴だな

なんか呆れられているみたいだけど、つて千冬姉もため息つかないでくれよ。

「あの、どなた様ですか？」

「仕方ないな。おー、答えてやれ

「はいはい、わかりましたよ。千冬さん」

「おー！そんなことを言つたら千冬姉の鉄拳制裁が……って言つてゐそばから……」

カツ！！

え、避けた？

「おつかないですよ。千冬さん……いや、織斑先生つて言つた方がいいですか？」

「初めからそいつ言え

バカ者、と小言を囁つ。

「お前今何やつたんで」

「え、普通に避けただけだけど」

「何サラッと言つていいんだよーあの千冬姉の出席簿を避けるなん
て、

「人間技じゃない」

「それは遠まわしに人間じゃないって言つてるよな」

あれ?なんか。になつていてるんだけど。

「織斑、こいつは打たれ弱いんだ。あまり気にするな」

「わ、わかりました」

「ええ！…いいんですか？！」

山田先生がおひおひしながら言つ。そんなことよりも

「すまないが名前まだ聞いていないんだが」

「落ち込んでる人に慰めの言葉も言わないと、貴様は鬼か！…
ああ、鬼の弟か」

「ドスツ！…！」

ああ、今度は当たつた。

「鬼とは誰のことだ？ぜひ教えてほしいものだな」

「すみません！だから、今振り上げている出席簿の下に『まだ生き
！俺まだ死にたくない！…』

必死になるよな。俺だって死ぬんじやないかつて思つ」とあるか
らな。

「じゅあ、わいつて血口紹介しますか」

頭を搔きながら男がこちらを向く。

「本口から！」お世話をなる黒翼
斑鳩だ。よろしくへー。」

1 篇（後書き）

……変じやないでしょうか？

それが一番の不安です。

お駒がしいようですが、感想をいただけるのなら、お願ひします。

2 節（前書き）

今日は不安です。

大丈夫でしょうか？

- - - 六年前 - - -

「一夏、元氣でね」

「斑鳩こそ、またいじめられるんじゃないぞー。」

「氣弱そうな少年、斑鳩を心配する一夏。新しい場所で大丈夫なのか心配していた。

「大丈夫だよ。そんなに心配しないでよ、一夏」

「お前は弱いからな、何かあつたら連絡しろよな！俺がすぐに行くから！」

「…それは篠ちゃんに言つてほしかったな」

斑鳩は一夏に聞こえないようになつた。斑鳩は篠が一夏のことが好きだと知っていた。

知った時は驚き、そして自分のことのよつと喜んだ。だから、篠の恋が成就するように協力していたのだ。

しかし、篠は一夏の関係で一夏たちに向も言わざ去ってしまった。

「斑鳩ー、そろそろ行こうぞ」

「わかつてゐよ。じゃあね、一夏」

「おう、こつか余おひまー」

そして、斑鳩は一夏たちとの思い出の地去つた。

斑鳩視点

「お前あの斑鳩か！？」

「あのつて何だあのつて」

全く失礼だぜ一夏。いへり俺が弱虫だったからって言つていい」とと悪いことがあるだろ。

しかし、俺も鬼じゃないから許してやる。

「千冬姉聞いてないぜ！斑鳩が来るなんて！」

ドカツ！—

「何度言わせるんだ」

うわあ、千冬さんマジ千冬さん。相変わらずの鬼のよいつのよつに怖いな。

「黒翼、お前、まだくらこたいなひむつ一度やつてやる。うねじいだるづ」

「いいえ！一夏はうれしいだらうけれども、俺は全然うれしくないですから……！」

なんで分かつたの、織斑先生。

「お前も一夏みたいにわかりやすくなつたから分かつたんだ」

や、そこですか。そんなんでしょうね。最近、姉さん達に考えて
いることがばれる回数、増えていぬし。なんだか変わったよな、い
ろいろ。

「いやあ、変わらないな」

なんだか視線が集まっているような気がするんだよ。

まあ、男が此処にいるなんておかしいしな。一夏は気にせずに話しかけているので、俺も視線を気にしながらも話を聞いている。

「斑鳩は変わったな。お前もエスを動かしたのか？」

「ああ、そりに専用機もあるのさ」

俺は腰に鎖の付いた懐中時計を一夏に見せる。色は灰色で鳥の絵が描かれている。

「へー、ならあとで模擬戦しようぜ」

「いいが俺は強いぞ。瞬殺しちまつぜ」

「負けないぜー！」

「こんな会話をしながら俺達は屋上に向かっている。

なぜかと言つと篠が昼飯を一緒に食べようと一夏を誘つたらしい。
十中八九一人つきりで食べたいと見た俺は断ろうしたが・・・

「大丈夫だつて！みんないいやつだから」

と言つし、わかつてないよこいつおやぢく。ほかの女性も誘つた
のだろう。

全く変わっていないね。篠がかわいそุดだな。

「一夏」

「何だ？」

「予言じてやる。いつか簞に背中を刺されつてな」

「は？ ビリコの意味？」

なぜわからないんだ、このバカは。

「やはり、お前は少し変わった方がよかつたよ」

「？？」

そんなくだらない話をしている内に屋上に続く扉の前に着いた。

「しかし、屋上が開放されているなんてな」

「まあ、珍しいって言つたら珍しいよな」

そして、いや扉を開ける時に俺は一夏をいじるアーテアが浮かんだ。
一夏、待つてろよ。

その時の顔はきっと悪い顔だったろう。

- - - 篇視点 - - -

私、篠ノ之篠は今機嫌が悪い。その原因は一夏なのだ。一人つきりで昼食を食べようと誘つたのだが、あいつは他にセシリヤや鈴、デュノアを誘つたのだ！全く！せつかく一人っきりになれると思ったのだが一夏め！あとで居合切りの練習台にしてやる！

「あら、篇さんどうかしたしたか？なんだか」機嫌斜めのようですが

けれども

「みんなに眉間にシワを寄せていると老けたるわよ、篠

クッ！」「ひ、私を心配しているが顔がにやけてるーー夏、お前は微塵切り決定だ！！

トントンー

?ん、何だ？

「篠ノ瀬さん、ごめんね、本当は一夏と一緒にきりで食べたかったんだよね？」（小声）

「い、いやーそんな」とはありえないーー

「クス、やつこいつ」としておへよ

「それにしても一夏さん遅いですね」

「何か山田先生と訓練機を片付けているみたいだけど」

それにしても遅い。ま、まさか、私の約束を忘れてほかの女子とかやっているんじゃないかなー??

「一夏さん、大丈夫でしょうかー!」

「大丈夫でしょう。あの馬鹿を心配しても無駄よ」

「あら、鈴さん。他人を心配するのは普通のことだと思いますわ」

そして、睨み合つ二人。背景に炎が似合つそうな雰囲気が続いているとなにやら話声が聞こえてきた。

「」の声は一夏の声だ!ん?待てよ。一夏は誰と話しているのだ。

此処はエジ学園。つまり女性しかいない。話しているのは必然的に女性になる。

「　　一夏(さん)……」

さつきの雰囲気はどうにダストショートしたのか、三人がシンク

口した。そして一夏が屋上に現れ問い詰めた。

「——夏、いつまで待たせるのだ！それにさきまで話していたのは誰だ！？」

「お、箪。実は斑鳩が来たんだよ」

「斑鳩？どこにいるのだ？」

「なに言つているんだよ。俺の後ろに - - あれ？」

「誰もいないではないか。あれ？では誰と話していたのだ？」

そう言いながら一夏に近づいたとき

「うわあ！！！」

「第一つでうわあ！」

後ろから誰かに押され体勢を崩し一夏もろとも倒れてしまった。

「痛たた」

「大丈夫か？ 築」

「ああ、大丈 - - -」

そういうかけた時私は今自分がどのような状態なのか知った。私が一夏に覆いかぶさるようにつまり、押し倒すような体勢になつていた。

「ツー！」

「おい、築？」

ち、近いぞ！一夏！し、しかしこの状態はいいかも知れない。これで一夏が少しでも意識するなら！

「私もす、好きだが……」、こんな人いつ来るかわからない所で

そう言いながら一夏は簫に近づいてくる。

「いいじゃないか。俺は簫が好きなんだから」

「い、一夏ー？そ、その・・・ち、近い・・・の、だが

「なあ、簫」

「……」から簫の妄想

といいながら心の中ではドンと来いーと構えている篇であった。

「いいじゃないか。俺はもう我慢出来ないんだーー！」

「い、一夏ー」

そして、二人の唇が少しづつ近づいていった。

- - - - -妄想終了 - - - - -

「フ、フフフ。し、仕方ない。なら私が最後まで相手になつてや

る。私に任せろ……」「

「あー、箒？ 涙が出ていいのんだが

・・・・・ハツ！ しまった。何を不埒なことを考へていいんだ。まだまだ修業が足りないみたいだ。

「お～い、箒」

「な、何だ！ — 夏」

少し声が大きくなつてしまつた。お、落ち着け篠ノ之箒。慌ててはいけない。

し、しかし少しは期待していいよな。

「そろそろどうしてくれないか？ 重くて

「・・・」

「 篇？」

「 フン！」

ドカッ ！！！

「 グヘッ！？」

期待した私が馬鹿だった。この朴念仁がそんなことをするわけがないな。

「 ・・・ プツ」

「 ツー？」

誰かに笑われたような気がした。しかし、セシリ亞や鈴はそんな様子もない。
デュノアも例外ではない。けれどもここには他に人はいない。

「篠、探しても無駄だよ。今は光学迷彩が起動しているから

「だ、誰だ！」

「さつき一夏が言つてたじやないか。俺が来ていろつて」

「さつき一夏が言つてた？・・・アツ！」

「斑鳩か！？」

「ハイ、正解だよ。よく出来ました」

そして、私の後ろにぼつそつとした人の姿が浮き上がった。

「どうも、久しぶりだね篠ちゃん

「斑鳩なのか！？」

「一夏もそんな反応してたね。さすが夫婦だね」

斑鳩が笑いながら言うが私の頭には『夫婦』といつ言葉でいつぱいだった。

「ふ、ふふ、夫婦！？」

「あれ？違うの？」

一夏と夫婦。 い、いい！

- - - - - はたまた第の妄想開始 - - - - -

「ただいま！」

「おかえり、一夏」

玄関に向かい一夏の荷物を持つフローフロンのエプロンを着た簞。

「ああ、ただいま簞」

「夕食の用意が出来ているぞ。風呂も沸いているし、どうぞ入る？」「？」

「そうだな、先になにか食べたいな」

「そりが、分かった。では」

そういう台所に戻るのとしたがいきなり一夏に腕を捕まれた。

「ど、どひつたんだ、一夏」

「幕、俺は夕食を食べるとはこってないぜ」

「では、なにを食べるんだ?」

「分かっこんだ。食べたいのは幕。お前だ」

「・・・!?

顔を赤くし驚く幕。しかし、心の中ではバッチャコーキーと構えていた幕であった。

「黙つてこらつてこいつのまことこの意味だよな」

「ま、待て一夏！？」さすがにそ、その、あ、汗をかいているんだ！
だから、せめてシャワーを浴びてから

「もうダメだー！？」

「キャツー？」

簫を押し倒す一夏。そのまま腹を空かした狼のようだった。

「一夏」

「いいな？簫」

見つめ合ひつ一夏と簫。その雰囲気はだんだんと加速していく。

「ああ、いいぞ一夏。私を食べててくれ」

そういう手を広げ向かい入れる体勢をする。

その姿は官能に満ち溢れていた。

「じゃあ、いただきまーす」

一夏の顔が近づいていった。

- - - - - 妄想終了 - - - - -

2 翼（後書き）

どうだつたでしょ、つか？

変なところが、・・・多々あつたと申ります。

筆幅へのみなれど、筆をじぶん風に書いてしまひしうませ。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

話が進むにつれて変更などがあると思いますが、宜しくお願ひします。

主人公設定

名前 黒翼 斑鳩（くろよく いかる）

性格は基本的に、おとなしく目立つのは控えているが知り合いには積極的になる。

方向音痴でよく道に迷う。
戦いになると無口になる。

顔は大部分は髪に隠れている。目は黒く、吊り上り睨めつけているように見える。（ソウル・ーターの阿羅を想像してもらえば良いかと）

家が武家のため、剣術、柔術、空手などをやっているため身体能力は高く、喧嘩も負け知らず。

簪とは婚約者であり、仲は良いが結婚までは考えていない。簪の

姉 - - - 樋無は苦手であり、会つと一寸散に逃げる。本音や虚とは
幼少期のときによく遊びこれも仲は良好。

一夏と篠とは小学校のころにいじめられていたのを助けられ、こ
のころから仲良くなつた。

家族構成は、母 兄一人 姉三人。父親は事故で亡くなつてゐる。

3翼（前書き）

初めて、感想をいただきました！

そして、最近アクセス数が増えてきています！

これからも、皆さんに読んでいただけるように頑張って行きたいと
思います。

えへっと、どうしようかね。篠ちゃんがヘブン状態になつてて当分帰つてこなそつだし。しかも、涎を垂らしながらとこうに女にあらまじめなことを。

「ちょっと刺激が強かつたかな？」

「おこ、どうして隠れていたんだよ。あと、篠をなんとかしなよ」

「いや、恥ずかしかつたから少し場を和ませた方がいいかな、と思つて。あと、篠ちゃんについては今はそつとしておけば大丈夫だか」

「いじまでの威力だつたとは思わなかつた。もはや、核兵器並だな。

「あの、一夏さん。」の方は一体?」

「私にも説明しなさいよ、一夏」

二人の女子が一夏に迫っていた。

「え、え~と。お、幼なじみの - - -」

「あ、紹介するよ。幼なじみの黒翼斑鳩だ」

「ど、どうも!」

一夏に感謝だな。女性に話しかけるのはどうも苦手なんだよな。

「女に話しかけることだけは相変わらずだな

「夏みたいに気軽に話しあればいいけど。初対面だから恥ずかしいしさ！なにが悪い！？」

「いや、悪くないけど」

「なんでわかった！エスパー！？」

「幼なじみだからじゃないかな？」

「なんてことだ！一夏にばれるなんて

「惨めだ…鬱だ…死にたい…！」

「俺にばれたのがそんなにショックなのかよー？」

「ああ、そうだな」（キリッ…）

「ハツキコと言つな……そのまま落ち込んどけ！」

何だよ、そんなに怒る」とないだろ。それよりも

「彼女たちを紹介してほしいんだけど」

名前がわからなければ、なんていつたらいかわからないし。

「おつと、そうだったな。セシリ亞、鈴にシャルルだ」

「イギリス代表候補生のセシリ亞 オルコットですわ」

「鳳 鈴音よ。中国の代表候補生をやつていいわ

「まうほう、彼女たちがお前の毒牙に掛かつてしまつた人かね。三人共ハイレベルだね」

「いや、一人は男だから」あれ、そうだったか。しかし、デュノアとこう子はどちらも女性に見えてしまつ。

「すみません。間違えてしまつて」

「う、うん。気にしてない。僕はシャルル デュノア。今日、フランスから来たんだ。よろしく」

「これは御丁寧に。よろしく」

親睦の証に握手したが、デュノアの手は男とは思えない柔らかいものだった。やはり女性じゃないかな？

「さて、やひそろ毎飯にしようぜ。腹が減つて」

「それもやうだな。」のあと織斑先生に学園の説明があるし

「織斑先生ですか？」

「何で千冬さんなのよ」

セシリアさんと鳳さんが尋ねて来る。

まあ、普通係の人に任せると俺がオロオロするから、特別に計
らって貰つたなんて言えない！

「それよりも腹が減つてしまふがないんだよ

「それもやうだね」

「時間もおしていわけですね」

「はい、一夏。これ」

鳳さんがタッパーを一夏に投げつける。中身は大丈夫なの？

「バカ、食べ物を投げるな。おお、うまいそうな酢豚だな！」

「今朝作ったのよ。感謝しなさい。何なら鈴様つて言つてもいいわ
よ」

「自己主張の無い胸を張っている鳳さん。何と言つか、非常に残念
です。」

「・・・あなたさ、なにか失礼な」とを考えてたでしょう

「いいえ。そんな初対面なのに胸が小さいな、なんて失礼なことは思つてないですか？」

「あつちつかつちつと思つてゐる」と呟つてござりやないの……」

し、しまつたあ！ 口が滑つた！ ！

「あ、す・・・すみません！ ない胸を張つたのでつい言つてしまつました」

「一夏ー！ こいつシメでいいー！ ？」

ギャアアアア…せりご悪化させでいる！ ？

「落ち着け、鈴！ 斑鳩も煽るなよー！」

「煽るつもつは無かつたんだよー?」

「鎧やん、レディーなら少し控えるべきですわ」

そして、一夏とホルゴットさんが鳳さんを抑えるのは数分後だった。

危なかつた!まだクラスにもいつてないのにこんな状態じゃあ先が思いやられるよ。

「わへ、俺も食べるとするか」

バックの中から弁当箱を取り出し、ふたを開ける。ちなみに中身は一口ロロッケ、ほうれん草のじま和えに鶏焼き。そして、白ごはん飯である。

「へえー、うますぎだな。誰が作ったんだ?」

「もちろん、自分でだ」

「何だ、お前料理できたのかよ?」

「まあ、できるのこじたことはないからな」

姉さんに扱かれたからな。やれ薄味だとか濃すぎるなど文句しか言わないし、俺は初心者だって!

「なあ、これ食べていいか?」

「構わねえけど、文句言つくなよ」

「分かつてゐる」

一口フロッシュを取り、口に運ぶ一夏。

「お、旨いなー。」

「ならいいが

と素つ気なく言つているが内心、不安だつたのは読者さんと俺だけの秘密だぜ。

なんたつて家族以外に食べもらつたのは初めてだからな。あれ

? 読者つて誰?

「どうした、斑鳩?」

「いや、何でもない。なんか変な電波をキャッチしただけだから。
それより、篠ちゃん。そもそも戻つて来ようよ」

篠ちゃんの肩を叩き、反応を見る。

「あー、一夏ー。そんなに激しくされたら私は……ハツ！」

「戻つて来たか。お楽しみの途中だけど篠ちゃん、昼休みの時間が
なくなるからいい加減一夏にお弁当渡したらアー。」

「へ、うむ。一夏、い・・・これをー。」

「お、お！」

一夏が弁当箱を受け取り、ふたを開ける。
その中には、鳥のから揚げにきんぴらごぼう等と和食のメニュー
だった。

「す、すいません。おこしゃつだな」

「かなり、手が込んでやつだ。貰つていいのか？」

「う、うでに作ったのだー。え、『気にするな』

「けれども嬉しこせ。あつがとへ、簞」

「そ、そつか・・・」

なんかいい雰囲気になつているよ。いいね、いいね。最っ高だね！
・・・なんかキャラが違うような『氣』がある。
しかも、オルゴットさんと鳳さんはなにやら不機嫌そうだけれど。

「一夏さんー私のサンディイッチもよければいいのー。」

「あ、ああ。あとで貰いつよ」

顔が引き攣つっている、一夏。

「一夏、どうしたんだよ？昔のや前なら喜んで貰いつのこ」（小瓶）

「い、いやあ。実はな、セシリアの料理は見たまはいいけど、味
がす」ことになつてゐるんだよー」（小瓶）

「そんなことがあるわけがない。あんなおこしきな」「元の

「じゃあ、食べて見るよ。セシリア、このサンドイッチ、斑鳩にやつてもいいか?」

「ええ、構いませんわ」

「では、いただきます」

パクッ

「……」

「……」

「どうですか？感想をお聞きしたいのですが」

「か・・・感想ね。そ、そそうだね」

はつきつぱつた方がいいだろ？ しかし、そんなことぱつたら失礼だし・・・。・・・・・・・・ そудー！

「一夏は」いつ味が好みだった気がするな

「え、ちよ、ちよっと待て！」

「そうですか。では一夏さん、どうぞー！」

ふう、何とか回避できた。一夏、オルコットさんに料理を教えた方がいいよ。

その内、もっと凄いものが出てきそつだから。うん、後で言つておひげ。

「ねえ、黒翼くん。僕にもお弁当、少し分けてもらつていいかな?」

「ああ、構いませんよ。どながほしいですか?」

「じゃあ、卵焼きももらえるかな」

「うむ、デュノアくん。なかなかいい目をしているね。この卵焼きは自信作なんだよね。」

「うん! 美味しいよ! 料理上手いんだね」

「そ、そうかな?」

「そうだよーあとで教えてくれるかな?」

「い、いいですよー俺でいいんだつたら」

なんかデュノアくんすぐに仲良くなれそうだな。

「一夏さん、お口を開けくださいましー。」

「一夏ー！食べちゃうあげるから口開けなさいよ」

そして、一夏。あなたは一体なにをやつたんだよ！
なんでオルコットさんと鈴さんが、あなたに乗りかかるような力
オスな状況で、取り返しがつかないことになつてているんだよー。

「みんな仲睦まじいんだね」

「いやデコノアくん、あれは襲い掛かっているんだって！？止めな
いとー！」

以外とデコノアくんって天然？！

・・・いやシッコんでいる場合じゃないー早く止めないとこうい
う大変なことになるつて！

そして、波乱の昼休みが終わつた。

3翼（後書き）

簪がまだ出てこない（泣）。

しかし、次回では出すつもりです。

次回も読んでいただきと嬉しいです。

4翼（前書き）

ゆつやくローテンの簪が登場！

でも、うまく書けているか不安です。

では、どうぞ……

「……という所で説明は終わりだ。何か質問はあるか？」

只今千冬さ・・・じゃなかつた。織斑先生に学園について説明を受けています。

え？ なんで飛んだんだって？ それは作者の力不足といつことで許してください。

ズバーン！

「私が話しているのに、考え方をするとはい一度胸だな」

「す・・・すみません。あ・・・後、質問があります」

「なんだ？」

「俺はどこの部屋ですか？」

これはとてもなく重要な事だ。うん、死活問題だからな。
願わくは一夏か『ユノアくん』と一緒に部屋に！

といつも絶対にその一人の『ユノア』にしてください。

「お前には悪いが女子と同じ部屋になつてもいい？」

・・・・・終わった。俺の人生、十五歳にして終了か。俺が女性が苦手って知ってるよね！

ああ、なんか走馬灯が見えてきた。

「ああ・・・なんだ。ショックなのはわかるが、あまり落ち込むな

「無理ですよ、そんなの。・・・なに『ヤーヤ』しているんですか？」

！」

「なに、予想通りの反応だったからな。ちなみに織斑は『ユノア』と一緒に部屋と私が決めた」

「故意なんですか！確信犯なんですか！なら一夏をまた篝ちゃんと一緒に部屋にすればよかつたじゃないですか

篝ちゃんが大喜びするしね。

その方がみんなハッピーになるし。うん！その方がいい！

「そんなこと認められるか。一夏が襲われたらどうする！？私はまだ、一夏をやるわけにはいかないのだ！これは決定事項だ！」

「一夏の身を案じていろんですね！？わかります！しかし、俺の身も案じてくださいよ！」

「だが、断る！」

ダメだ、どうしようもないくらいブラコンが進んでいるよこの人。
もし一夏が結婚するようになつたら姑以上につるせそうだな。

「大丈夫だ。そんな女は作らせないし、もしできたならコンクリートで固めて、海に沈めてくれる！」

「大丈夫じゃない！大問題ですよ！？」

本格的にやばくなつてきたよ。逃げていいんだ、逃げていいんだ、
逃げていいんだ！

・・・え？普通、反対だつて？いや無理だつて！！

「織斑先生。何をされてるんですか？」

なんか助けが来た！確か、え～っと・・・山田先生！

「あ、嗚呼。山田先生か？今こいつの部屋を教えるといひだ

助かりましたよ、山田先生。今ならあなたを神と崇めてもいいよー。

「では、部屋の番号を教えるからそこ這い。私は仕事が残つてゐるからな」

「では寄り道せずに言つてくださいね、黒翼くん」

寄り道する所あるのかね？まあ、部屋については諦めるか。
なんかもう、世界の理じみたいな壮大なことみたいだし。

反対したら、命がいくつあってもたりないって。早く部屋に行こう。

そして俺は足を進める。

- - - - -

「うーだな。 . . . うん、間違えない」

教えられた部屋の前に到着したんだけど、

「ねえ、あの男の子ってあの噂の？」

「みたいよ。しかも、織斑くんと仲よさそうだったし」

「もしかして、織斑君とできているのかな！」

・・・女子の視線が痛いです。つて最後の！

俺はそっち方面じゃないからな！？断じて！一切合切！微塵も…！
ここに居ても仕方ないし、入るとするか。

「し・・・失礼します。誰か居ませんか？」

入るとそこには高級ホテルのような部屋が広がっていた。さすがエ
S学園ということだろう。パソコンやらふかふかのベットがあるし。
けど、部屋に誰もいないんだよな。織斑先生がいうには女子と同じ部屋だつていってたよな。あれは嘘だつたのか？だったら、感謝

しないとなーでは部屋の確認をするか。

まずは、シャワーからかな。一夏が大浴場は使えないから気をつけて、ってたからな。いや、使おうとこいつ時に使えなかつたらやだし。そういうシャワー室に向かつ。

「ほーう。なんか使ひの、もつたいない気がするな

だつてす」いんだよ。きれいで高級感が漂つてるんだぜ。こんな所に暮らすとなると、なんだか緊張するな。

「・・・誰か居るの?」

「ツー?」

「・・・声がしたな。しかも、シャワー室から。・・・となると今女子が使つている?!

まよい、マズイ、まよいでしょ!-

「・・・本音?今・・・出るから」

しかも、誰かと勘違ひして出てきただしーヤバいよ、ヤバいよー。ああ、ドアを開けないで!

「…………誰？」

「あ、アハハツ」

ドアが開いてしまい、乾いた笑い声を出すしかなかった。中から出てきたのは空の青をそのまま写したような色で髪は肩までかかり、髪先はくせなのか、内側に向いている。しかし、どうしてだろうか。その子は俺の顔をまざまじと見てている。

「あのー、俺の顔になにか付いてますか？」

「……斑鳩？」

「え、なんで俺の名前知っているの？」

もしや、知り合い？でも誰だ？？？それよりも！

「な、なにか、着てもらいたいんだけど

「…………？」

自分の状態に気がついたのか、シャワー室のドアを壊れるんじゃないかという勢いで閉めた。

あ、ヤバい。鼻血が出てきたの。ティッシュは何処に。

- - - 数分後 - - -

「失礼なのは承知で聞きます。あなた誰ですか？」

「・・・本当に・・・覚えてない？」

そんな捨てられた子犬のような顔をしないで。

「・・・すみません」

「・・・グスン」

「あ、ああー? 泣かないでトセー! お願いします! なんでもしますから!」

「・・・ほんと?」

そんな捨てられた子犬の以下省略。

「本当にすつて! 神に誓つて!」

「・・・じゃあ、許す」

よかつた。一気に肩の力が抜けたよ。

「じゃあ名前、教える。私は更識 簪。・・・覚えてない?」

更識 簪。・・・え! ? もしかして!

「かんちやん!」

そういうと簪。・・・かんちやんは俺に抱き着いて来た。

「えッ…ちゅうと、かんちゃん…？」

俺の体に慎ましいも軟らかい物が当たってるんだけど…

「うん…うん…そうだよ、私…だよ。会いたかった、斑鳩
！」

なんか抱き着く力がさらに強くなつてゐて！
ヤバい、鼻血が出てきた。

「かんちゃん、嬉しいのは分かつたから離れてくれない？」

「…・やだの？」

「そんなことはないー・むしむのまま、ベット上・・・ゲフンゲフ
ンー。」

何、言いつとじてたんだ、俺…まるで変態見たいじゃないか。

「・・・斑鳩」

「な、なんでもないよ…気にならないで…」

「わ…・・・私は・・・構わないよ」

「・・・はあい？」

なんつて言つた? もつー回? 今の葉葉、もつー度お願ひします。

「だ、だから! 私を・・・押し倒し・・・」

「ストップ! -ストップ! あよ、簪さんや! -」

何言つてるんだよ! 女の子がそんなこと言つちやダメだつて! ?

「だつて斑鳩に・・・ならナ! / れども・・・いこよ! -」

顔、真っ赤ですよ、かんちゃん。俺も顔が熱くなっているのがわかるし。

「でもそんなことしたら、ダメっしょ」

「・・・者なのに?」

「ん? なに?」

小さすぎて聞こえなかつたよ。

「だからーー、婚約者なのに?」

・・・やつ。俺とかんちゃんは婚約者なのだ。

俺の家 - - つまり黒翼家とかんちゃんの家、更識家は親が仲が良く、困った時は助け合っているのだ。俺とかんちゃんもそれで知り合つた。

それで両家の仲を堅くするために、お互いの子供を結婚させようといつ」となり次男の俺が選ばれ、更識家からは簪が選ばれたのだ。

「いや……婚約者だからって、それは……流石にまずいんじゃ
ないかな?」

「……なんでもするつて……言つた」

今使いますか、それ!?)拗ねた顔をしない!

「お願いです!他のことにしてください。」

「……分かった。」

いや、そんな残念そつこしないで。

「……それより、斑鳩はどうしてこの部屋に来たの?」

「あ、ああ。実はこの部屋に配置されたんだよ」

「えつー!?」

そりやあ驚くよな。俺も驚いたもん。

「…………じゅー、一緒に……寝食を」

「ともにやだひつな

・・・かんちやんが固まつた。まあそりうなひよな。

「・・・本当?」

「本当」

「・・・アシジ?」

「アシジ

なんか肩を震わせ始めたよ。ヒーとつあえず話を変えないと…

「かんちやんー。」

「…………な、なに?」

少しひびきりした表情を浮かべていた。なにか考え方でもしてい
たんだろうか?

「とにかく、これから面会へ

「う・・・うん!直じへー!」

そういったかんぢやんの顔は少し赤くなっていた。

4 翼（後書き）

とこりわけで、ヒロイン登場です。

今後も簪を可愛く書いていきたいと思います。

PS 来週からテストが始まるので投稿は遅れます。
誠にすみません。

5 翼（前書き）

アクセス数が一万を超えた！！

こんなド素人が書いた作品を読んでいただきありがとうございます！

これからも宜しくお願いします。

朝の田差しがカーテンの隙間から入つて来る。
俺の隣のベットを見ると、

「ス・・・ン～ス～ン～」

「・・・何で、熟睡しているんだよ」

簪がいる。俺は全然眠れなかつたつて言つのに。

「本当に無防備だよ、全く」

子供のように安心して寝ている。いつまでも見ていていい。
そして守つてやりたい、そんな寝顔だ。しかし、そろそろ起きな
ければならない。

「・・・簪。起きる」

「うへん

小さい頃に簪の家に泊まつた時のことを思ひ出す。ここは朝に弱く、起きてゐるのが遅かつた。

「つたべ、仕方ないな」

簪に近づき、布団をさがす。

「まひり、朝だぞ！ いい加減起きろ」

「うへん？ もう朝？」

皿をこすりながら、起き上がる簪。
なんか、ほんと子供っぽいよな。

「ほれ、顔を洗つてこい。そつすれば、少しはマシになるだろ」

「・・・わかった」

ふらふらとした、足取りで洗面所に向かって行った。

ああ、転ぶなよな。全く世話が焼ける。

しかし、じつこのを面白く感じている自分がいる。

「顔、洗つた」

お、戻ってきたか。少しあ困が覚めたかな。

「髪はねてるじゃないか。直せよ」

「・・・斑鳩、やつて」

「なんでだよ。自分でやつなさい」

「・・・昨日の事・・・」

・・・それ言わると、なにも言えない。

「・・・ハア、わかったよ。ほれ、後ろ向け」

「・・・「」

なんだか嬉しそうに声を弾ませる。

そして、髪を梳きはじめた。かんぢやんの髪を触ると軟らかく、そして女の子独特的の甘い匂いが鼻をくすぐる。なんだかドキドキしてきた!だがここは落着いて!

「痛くないか?」

「・・・「」

かんぢやんの声まで甘くなってしまった。

は、早く終わらせないと、俺の(理性の)コントローラーが一

「・・・斑鳩・・・早く終わらせないとこいつは…」

「そんなことはないって(多分)。・・・これで終了だよ。じゃあ、
早めに着替えるんだ」

「・・・手伝ってくれないの?」

まだ寝ぼけていたか。

「無理に決まつてゐるだろ、普通に考えて。自分で着替えろ!」

ヒーリングでも子供なんだよ。子供っぽいのは寝顔だけにしつか。

「・・・・・わかつた。・・・斑鳩のイケゞ」

「はいはい、イケずで構わないよ」

そっけなく言い放す。甘えるのはイイが限度がある。

・・・・・俺の理性にもな

「じゃあ、俺は先行かないといけないから」

「・・・分かった」

「大丈夫、すぐに会うことになるわ。だから、そんな顔すんな」

「・・・うん！・・・」

さて、かんちゃんの機嫌も直ったことだし、職員室に行かないと。
また、あの鬼の鉄拳を喰らいたく無いからな。

「ほほ～う。その鬼とは誰の事かな？」

「それは勿論、千冬さんしか・・・ってあれ？」

おかしいな？俺の前に、修羅すら裸足の全速力で逃げだす人（？）
がいるように見える。
何故、ここに？

「私はこの寮の責任者だからな。それなので、お前の様子を見に来
たわけだ」

「そ・・・そ・うでしたか。それは、存じ上げませんでした。

「さて、さつきの話の続きをしようではないか？・・・鬼とは誰の
事かな？」

「わ、わかりきったことを聞きますか、普通う！？」

言い終わる前に、千冬さんの鉄拳が剛速球の様に、俺の顔、目掛け
て放たれた。
だがしかし、喰らう訳にはいかない！瞬時にバックステップをし、
千冬さんから離れる。

「・・・つむ、なかなかいい反応だな。これも奴が鍛えたからか？」

「やつですね。死ぬほどじるかれたからね」

「のべりこなしまだかわせるが、相手は世界一の女性。本気になつたらかわせるかわからな」。

「織斑先生、早く職場に行きませんか?...そのためには、来たんですから!...」

「あからさまに、話を変えたな」

「悪いですか?」

「・・・まあいい。ではいくぞ」

「・・・ハ、ハイ。じゃあ、かんちゃん。後で」

「・・・うそ」

かんちゃんとわかれ、織斑先生の後をついていく。
新しい生活が始まるのか。俺の心は少し高鳴っていた。

- - 簡 視 点 - -

斑鳩とわかれ、教室に着き、私は打鉄式式のプログラムの調整をしていた。

もうすぐ学年別トーナメントが始まる。このトーナメントは全員が参加しなければならない。

だから、私は少し焦っていた。代表候補生だが、専用機も無いためか、クラスの視線が冷たい。挽回するにはこのトーナメントで勝つしかない。

それに・・・い、斑鳩がいるし。いいところを見せたい。

「・・・頑張らないと」

自分に励ましの言葉を送る。一人で打鉄式式を作り上げ、お姉ち

やんに並びたいといつ思ひで、頭がいっぱいだつた。

「はーい！みんな、席に座つて」

先生の呼びかけでクラス全員が席に着く。

「ホームルームを始める前にみんなにお知らせがある。昨日、うちのクラスに転校生が来るって言つたわよね？一日遅れたけど紹介するわね。 - - - ジャあ入つてきて」

「失礼します」

教室のドアが開き、斑鳩が入つてくる。

「自己紹介してくれる？」

「はい。本日からここで皆さんと一緒に工芸を学ぶ、黒翼斑鳩です。宜しくお願いします」

斑鳩が自己紹介を終えると、クラスに沈黙が流れる。

「……どうした？男が来たからびっくりしたのか？」

「自分なんか変なこと言いましたか？」

先生と斑鳩が不安そうに言うが、次の瞬間

「　　キヤア～～～！～～～！」

教室に絶叫が響く。

「ついにうちのクラスにも男が！」

「それにカッコイイ系の一」

「ミステリアスでイイ！」

次々と女子の歓喜が出てくる。しかし、私の心はチクリと痛んだ。
斑鳩は私の婚約者なのに、そんな考へで頭がいっぱいになつてい
た。

「それじゃあ、席は更識さんの後ろの席ね」

「はい、わかりました」

斑鳩がこちらに近づき、

ГЛАВА

「 . . . うん . . . 」

少しよそよそしい挨拶をかわす。これは斑鳩の希望で、みんなの前ではあまり目立つ事は控えている。

あんな」とをしたいし、『あんな』とも斑鳩とやつてみたい。そん

なピンク色の妄想を一田中考えていた。

「え、へへへ。じゅる」

あ、いけない。涎が止まらない。

6 真（前書き）

小説の難しさがわかつてきた学生逃避です。

今回はかなりダメな文章になっています。

「ふう、終わった」

初日の授業も終わり、俺は一息入れていた。転校生が男だから珍しいのだろう。質問攻めで参ってしまった。

しかも、かんちゃんの突き刺さる視線があった。嫉妬しているんだとわかっているが、目立つのは嫌だから部屋で何とかしよう。だが、その前にやらなきゃならないことがある。

「更識さん」

「・・・」

「済まないが、生徒会室つてどこにあるのかな?」

無視ですか。ムス、つとした顔でディスプレイを見ている。

ねねりべーひの調整をしてこらのだらい。

「あ、黒翼くん。どうしたの?」

クラスメイトの女子が話してかけてきた。

「ああ、生徒会室はどないあるのが更識やんに聞いていたところだ
よ」

「あーそ、それじゃあそー私が案内するよー。」

なんだか興奮しながら、言っているが近づきすぎだつてー。
だがなぜか後ろに引っ張られていた。振り向くと制服の端を掴む
かんちゃんの姿があった。

「更識やん?」

「・・・私が・・・案内・・・する」

「で、でも更識そこまでしちゃうだし、アタシはヒマで時間があるしー。」

「・・・いい。・・・行こ。・・・」

誘つてくれた女子に田もくれず俺を引っ張っていく。

とりあえず謝つてかんちゃんについでいく。

100

生徒会室の前に着くと、かんちゃんはそのままじいかに行こうとしていた。

「かんちゃん、ありがとな」

「……気に……しないで……」

そういうと来た道を戻つていった。やっぱりまだ、楯無さんに引き田を感じているのかな。

でもやっぱり、姉妹なんだからいつかは……とこけない！今から暗くなつてどうする。

「のままじや、楯無さんと弄り倒されん！」

「あら？ 斑鳩くん？」

「あ……た、楯無さん。お、お久しぶりです」

田的の楯無さんが現れた。かんちゃんの姉でいい、HIS学園の生徒会長。

おまけにロシアの国家代表もある、出鱈田な人。まあ、うちの家族も出鱈田だからな。

「なんか失礼な」と考えてなかつた?」

「なぜ、ばれたし!」

「お姉さん隠し事は出来ないのよ」

扇子を開き、口元を隠す。扇子には『千里眼』と書かれていた。

「それにしても久しぶりね。元気にしてた?」

「楯無れども、虚れど迷惑かけてたんでしょ?」

「・・・で、中に入つてゆつくり話でもしましょ?。お茶もだすわ

ナチュラルに話をさらしましたね。ところども図星とこづわけ
か。

「そんなことはないわよーお姉さんだつて、胸だけ大きくなつたわ
けじやないのよ」

胸を見せるよつたグラビアのよつたポーズをとる。

かんぢやんとは対象的に、その存在は強烈だった。

「斑鳩くん、鼻血出てるよ。もしかして、お姉ちゃんに欲情したりやつたかな？」

「そ、そんなことはないですよーーこれは、そ、その……」

いい言い訳が見つからないーーどうしたらいい……。

「あー、斑鳩くん？」

「あー、くわづちだー」

「J、Jの遅い口調はー

「本当に虚なんーお久しぶりです」

た、助かった。グッドタイミングですよ、一人とも。

「くわづち、鼻血出てるけど、どうしたのーー？」

そこには触れてほしくなかつたぞ、本音！

「あ、気にしないで……は、ははは」

「会長、ここで立ち話もなんですから部屋に入つたらどうです?」

「うん、それもそうね。斑鳩くん入りましょー

れあが盡れる、手賣れてる。

まあ、何年も樋無さんに付き添つているんだからこれくらいなんともないんだろうけど。

そうして俺は生徒会室に入つた。

「ハイ、ビバヤ」

「あ、すみません」

虚せんが紅茶とクッキーをだしてきた。

「ず～う。ああ、美味しいですね。」

「でしょ。虚ちゃんが煎れた紅茶は世界一なんだから」

確かにそうかもしねない。

こんなに美味しい紅茶は久しぶりに飲んだな。

「そんなことはありませんよ、お嬢様」

「お嬢様じゃないでしょ」

「やつでした、会長」

お辭儀をしながら虚そは席についた。
ちなみには本音でこいつに座つてこな。

「わやしね、へいひー」

「お前も極度わざだな」

「でもメイドは見えないな。」

「虚さんもかわいすお兄様だわ」

「ええ、といひで今度はいつのよひな用件でしょつか？」

「虚さん、そんな堅じ口調じやなくともここであつよ。小ちこ頭せよ
く遊んだ仲なんですから」

「へり俺がかんちゃんの婚約者だからって黙るまいだよ。」

「でも、なにこいつはせなこまかせな」

「まあ、いいじゃない。ヒルハド今田せんじつこの用件?」

「ただの挨拶ですよ。お義姉さん」

「そう、樋無さんには挨拶するためにきたのだ。ただそれだけのため
だよ。」

「あら、義理堅いのね義弟くんは」

「そのよつじょ育てられましたからね。」

「ミラチコヒ。」

「といふでさ、簪ちゃんは・・・どうかな?」

「姉妹なんだから、自分で本人に聞いたりどうですか?」

「き、聞けないから聞いてるんですけど...」

やつぱりか。

「やつですね、なんだか工事の調整をしてましたね」

「あー、やっぱつ」

なんか心当たりがあるんですか。

「やっぱつてなんか知っているんですか?」

「いやあ、実は簪ちゃん専用機持つてないのよ」

え? 代表候補生なのになぜ?

「だつてね、簪ちゃんの専用機の開発元はね・・・倉持技研なの」

「確かそこは・・・」

「やつ、織斑一夏くんの専用機を制作したところな訳で・・・」

かんちゃんの専用機の開発が打ち切られた訳か。

「でも普通JSはチームで造りますよね。かんちゃんは、一人でやつてるみたいでしたけど」

「それに関しては、私が原因ね。私が一人でＩＳを完成させたから」

・・・・・ ハア？ 今、何て言つたこの人。 一人で？
もう一回言おう。 ・・・・・ ハア？

「そんな呆れた顔をしない！ 一人つて言つても、七割方出来てたし、
残りをね」

「呆れるのに十分なことですよ。」

大体のことはわかつた。

多分、かんちゃんは樋無さんと並びたいんだと思つ。

周りの人は樋無さんの妹のかんちゃんに期待をして、比べられるのが嫌なんだろう。

俺もそうだ。兄さんや姉さんたちと比べられ、周りの勝手な期待を受けて失望されて。

今のかんちゃんは、昔の俺のように見える。だから俺は自分は自分だと割り切つて逃げたのだ。しかし、かんちゃんには、そんな風になつてほしくないから手を貸してやりたい。

「樋無さん、かんむりさんの専用機の制作って俺にも手伝えないと
ないですかな?」

「フフシ」

樋無さんが微笑む。

「ビ、ビリしましたか?」

「ううん。簪ひちゃんはいい婚約者をと出会えたなって思つただけ
よ」

「ハイハイ、いじめうさま

「なにを言つてるんですか?...」
「...」これは、幼なじみだからですよ

「へーー信じてないこの人!」

「とかく、俺なか出来ませんかね?」

「いや、斑鳩くんだつたら十分力になるわよ。もしもの時は整備科

に協力してもらえば、いいと思つわよ。私もお世話をなつたし

整備科か。なるほど、覚えておいで。

「じゃあ、俺も行きます」

そう言い、席を立ち生徒会室から出て行った。

「気が早いのね、斑鳩くん」

「それ程、簪様を大事に思われているのですよ

「ぐるりち、カツコイイ」

「・・・そ、う言、え、ば、斑鳩くんは方向音痴じやあ・・・」

「「あ」」

生徒会室に沈黙が訪れた。

7 真（前書き）

今回はとても短いです。

しかも、内容が薄いといつもおまけ付きます。

「ベリーナなんだ?」

俺はかんぢやんを探している途中だった。確か整備室があつたはずだけども、どこの整備室だかわからずについた。
ああ、どこの整備室か聞くとけばよかつたな。

「おーい、へうつうつーーー。」

「おのーのー

「本音。どうした?」

「実はね~お姉ちゃんに手伝つてこい、と言われたの~」

手伝つて、逆に足を引っ張るわけないか?

「あ～！今、失礼な」と考へてたでしょ～

「やうだな、具体的に言おうか？」

「むー、へりちじわるー。」

「どひでもこいつへ言つた～！ひどい～

だああ～！面倒なことになつたよ。俺は急いでるんだよー。

「かんぢゃんがどこにいるかおしえよ！」とおもつたのこー

「聞かせてくださいー。」

「フフッ。わかればいいんだよー。」

えつへん、胸を張る本音。

ええーい！話すのが遅いわ！もっと速く言えーー！

「かんぢやんせ第一一整備室ニテム」

第一一だな。早速行くか！
俺は走り出とした。

「へうつち～、第一一整備室がビニにあるのかわかるの～？」

「…………わからぬ」

しまつた！？まだ来たばかりだから、ビニなどにあるかわから
ないんだよな。

「へうつち～ひつだよ～

「わかつたよ

俺は本音に案内してもううじかなかつた。

「……………？」

私は第一整備室にいる。今は武装のチェックをしているが、どうもコアの適性値が上がらない。

全距離対応の機体を造りたいが、コアに合わないのか、うまくいかない。このままじやトーナメントに参加できない。

「・・・どうすれば・・・」

その時頭にお姉ちゃんの顔が浮かんだ。

優しく、優秀で、強く、魅力的な人。私では敵わない人。でも時々、敵わなくてもいいんじゃないかと思う。私には斑鳩というヒーローがいる。

学園で久しぶりに会った時、斑鳩が大分変わっていた。弱虫の雰囲気はどこにもなく、一人の男になっていた。だから、私はお姉ちゃんに敵わなくてもいいから変わらうと思つた。斑鳩に相応しい女になりたい。斑鳩の隣に居たいから。

「・・・よし！・・・」

気持ちを入れ直して、『ディスプレイを見る。

「へえー、ここが整備室か。結構広いんだな」

「当たり前なんだよー。だつてたくさんの工事をいっぶーい整備するところだからね~」

今の声つで、もしかして！

「・・・斑鳩・・・後・・・本音、邪魔」

「どーも、頑張りますね」

「ひどいよー、かんちゃん。お手伝いにきたのにーー。」

手伝い?つまり斑鳩も?

「まあ・・・あんまり力になれないかもしねないけど・・・な」

苦笑いしながら頭を搔きながら言い、顔は少し赤くなっていた。

「・・・ダメ」

「なんでだよ。三人でやつたほうが効率もいいだろ?」

断るのが以外だったのだろう。斑鳩の顔は驚きを隠しきれてない。でもダメだ。この好意に甘えたら、斑鳩の隣にはいられなくなるような気がする。

甘えるだけで、斑鳩に迷惑をかけてばかりのダメな人間に思われる。

そんのは嫌だ。私だけの、たった一人のヒーローがいなくなるのは堪えられない!

だから、これだけは自分一人でやりたい。

「かんちゃん」

「ダメ……。だから、どこか、行って」

「……もしかしてさ、これくらい一人で出来ないといけない、とか思ってない?」

「……ツー?」

確信を突かれて動搖する。それが顔に出たのか、斑鳩はため息をつく。

「やつぱりか。なんでそう決め付けるんだよ」

「そ、それは……」

言つたらダメだ。言つたらきっと斑鳩は私に失望してしまう。
嫌だ! 斑鳩だけは、他の人ならまだ我慢できる。でも、斑鳩だけにはそう思つてもらいたくない!

「かんちゃん。この世の中、一人で出来ることなんて限られてるよ

?だから、人は協力して出来ないことを、出来るよつてあるんだじゃないのかな？樋無さんだって例外じゃない」

「え？」

お姉ちゃんも？

「聞いたんだ。樋無さん、専用機完成するのに、いろんな人のアドバイスを貰つてやつと完成したんだって。あの完璧な更識樋無がだよ」

お姉ちゃんが？そんなの知らなかつた。今まで比べられるのがいやで、ずっと避けてて知らなかつた。

「だからせ、別に気にしなくてもいいんじゃない？かんちゃんはもう少し、俺に甘えなよ。な？」

斑鳩が笑いかけながら言ひ。その顔はまるで悪を倒し、弱いものを助けるヒーローのように眩しかつた。

「・・・いいの？」

甘えていいのかな?

「ああ、なんでかしれないが、あんまり人がいないからな。大丈夫だろ」

「私も大丈夫だよー」

「・・・じゃあ、お願い・・・」

頭を下げて言つ。今の私じゃあこの打鉄式式は完成できない。

だから、

「力、貸して・・・」

「よしー!じゃあなにから始めればいいんだ?」

「畏まりました~お嬢様ー」

「その、お嬢様は、やめて・・・」

お嬢様なんて言わると恥ずかしい。

・・・斑鳩に言われるならいい - - - なんて考えていない！

少ししか、考えてないもん！！

「どうした、かんちゃん？顔が赤いぞ」

「え、気にしないで！なんでも、ない」

「だつたらいいが」

そういうと斑鳩は、展開中のモニターを見るのに集中した。

私はそつと斑鳩の隣に肩を寄せるように立った。少し恥ずかしかつたが、胸の高鳴りが心地好かつた。

やっぱり斑鳩は私のヒーローだ。そう、改めて確信した瞬間だつた。

7 翼（後書き）

12月27日 追加

いつも、学生逃避でござります。

今年ももうすぐ終わりますが、来年も頑張って書いていきたいと思います。

本題ですが、年末年始の投稿についてですが、お休みをせてもいい

ます。
本来なら、24日の投稿に書けばよかったです、急に用件がで
きました。

誠に勝手ですが、宜しくお願いします。

8 真（前書き）

明けましておめでとうございます。先生逃避です。

今年度最初の投稿になります。

これからもよろしくお願いします。

最近、クラスが騒がしい。

その内密はもちりん、俺とかんなやんのいじだ。

「斑鳩くんっしや、更識さんと仲っこよね？」

「部屋も回じみたいだからね。自然とやつ見えるだけだって

「でもや、一緒に更識さんの専用機の調整してたんだよー。」

「ええーーー嘘ーー？」

「本当に。昨日も一緒に作業してたの見たもの」

がやがやと騒がしくなっている。

女子は元気だね。真相を確かめようと休み時間や放課後は必ず追いかけて来る。

おかげでいつも疲れとストレスが溜まつてこぐ。

「・・・ハア・・・・」

憂鬱な気分をため息とともに外に出そうとするが、憂鬱な気分は晴れない。

一夏は「いつの鈍感だから平氣かもしれないが、俺は『テリケートだからな。

「あ、斑鳩くん」

「あれ？ 山田先生、ビリしましたか？」

「はい、実は今週の土曜日に斑鳩くんの入試試験があるんです」

はて？ 入試試験は編入する前にやつたような。

「試験つてなにをするんですか？ 筆記試験はやりましたし」

「HISの実技試験ですよ。斑鳩くんの場合は学園側が準備する」とが出来なかつたんですが、ようやく出来たので土曜日に行つことが決定したんですね」

くそー。ん?“じゃあ試験なんだからさ、本気でやつてもいいってことだよなー。

「い、斑鳩くん? どうかした? なんだか恐い顔をしてるけれど」

おつと、いけない。山田先生が怯えながら俺に聞いてくる。
ここは笑顔、笑顔。

「いいえ、なんでもないですよ。 - - - ただ」

「ただ？」

「田頃溜まつたものを発散できると思ひと嬉しく、うれしく。フフツ、フフツ」

悪魔のような笑い声で笑う。ああ、楽しみだな。早く土曜日にならないかな。

- - - 放課後 - - -

「今日はもう遅いし、11時までとしよう」

「ういいー、疲れたー」

本音は机にべとおー、と寄り掛かった。

「ありがとう・・・。かなり、はかどった

「俺はあんまり、力になれなかつたがな。以外に本音が使えたから
だよ」

「以外つてー、失礼だよー」

本当に以外だった。流石は虚さんの妹だな。少しあはやるようだな。

「お腹へつたなー。でねー、食堂に行こいよー」

「そりだな、かんちやんはビーフある?」

「・・・いいの?」

いや、俺が聞いているんだが。なぜ聞き返す?

「だつて斑鳩、噂になつて・・・め、迷惑じゃないかな・・・つて

なるほど、気にしてたんだ。その気配りはありがたいね。

「今更、どういひじょつが意味ないつて。気にするなよ」

「・・・なら、行く」

「それじゃあ～、食堂に向かってしゃべりはじめる。

ぶかぶかの袖で手が見えないが、本音はしつかりと俺の手を掴む。そのためか、本音の母性の塊が俺の腕に当たる。

「・・・むう・・・」

かんちゃんが少し頬を膨らませながら俺を睨む。
いやかんちゃん！俺のせいじゃないよね！…どうしたのか？！

「ああ～、かんちゃんもしかしてじょらしい、感じている～？」

「・・・ッ！？そ、そんな、ことー。」

顔を真っ赤にしながら言つても説得力が皆無だよ、かんちゃん。その慌てっぷりを見て少し、ほんの少し萌えたのは秘密である。

「本音、手を離せば済む」となんだから離せ

「ええー」

「ええーーじゃないーともかく離せ。それと食堂に行へや

無理矢理に腕から離すと、振り返りながら食堂に向かう。

「へりつちへ、へりつちじやなこよー

「・・・・・

まだよく場所が掴めていない、道を間違つゝがよくはある。
早く覚えないとー！

食堂に着くと姫田、注文の品をもりこ食堂の一一番奥の席に座る。かんちゃんは、かき揚げがのつたうどん、本音は焼き魚定食、俺は煮魚定食と綺麗に別れた。

「こっただきま～す！」

本音は席に座るとすぐに食べ始める。いつも遅いはずなのに、なぜか速い。

「斑鳩、どうかしたの？」

「いや、気にするな。ぐだらないことだから」

「・・・わかった」

そういうと、かんちゃんは他人からの目からは無表情に見えるが、俺からすれば少し楽しそうな顔で、かき揚げをつゆに全て浸けた。

「なんだか楽しそうだな」

「やつ、見える？」

「ああ、一応幼なじみでもある」

「」
（）で婚約者と書いたらかなりの騒ぎにならうからあえて幼なじみと書つたのだが、

「・・・やつ。・・・婚約者つて書くばよかつたのこ」

かんぢゃんがへソ曲げて冷たくなりました。
かんぢゃん、最後小さく書つたんだろ？
けど、（）はあえて、スルーしよう。

「あ、そうだ。今週の土曜日は手伝えないんだ。すまない」

「えへ、どうして？」

「なんか実技試験みたいなのがあるんだ。それで」

「こめれい〜？」

「学園側が準備出来なかつたんだと」

「へえー、わかつた～」

「頑張つてね・・・斑鳩」

「おひ、任せとこ」

出来るだけ笑顔で言つと、周りが少し騒がしくなる。
なんか俺、変な事してないよな。かんむりやんも顔を赤くしてゐるし。

「本音、俺はなんかやらかした?」

「うふ、おりむーみたいの!」

「？」

全くわからない。しかも一夏みたいのつてまさか - - 。
まあ、どうでもいいか。今は土曜日どうこう風に戦つか考えてお
かないと。

「ねえ、斑鳩……。斑鳩の試験データ、参考になるから……見に行つていい?」

「あ、そつか。実戦データも必要か。構わないけど」

「ありがとう」

これは大変だ。いいデータを出さないといけなくなっちゃったな。えげつない戦いするつもりだったけど。でも、まあ楽しみだな。はやくならないかな、土曜日に。

「・・・とにかく、試験を行つが準備はいいか?」

「画面の前の読者様ですか?」(キロッ)

「誰に話つてゐるんだ?」

「・・・とこいつは土曜日になつました」

「・・・」

「くうつか、電波」

織斑先生、そんな痛い子見るような田はやめてくださいよー！？かんちゃんまで！

そして、本音！おまえだけには言われたくない！？

仕方ないでしょ！日本に書いてあるんですから。その田は作者に向けてくださいよー！

「え、え～っと、そういう始めないとアリーナの使用時間は限られてくる訳ですし」

「や、山田先生が・・・まともな」とを言つてこるーー。

「ひ、ひどいですよ、織斑先生！」

山田先生が織斑先生に涙目で迫る。

しかし、迫力がないためか子供が母親に泣き付くよつこしか見えない。

ちなみに母親は織斑先生だ。

「私はそんなに老けてないぞ。それに天然キャラの娘なんていらん」

あれまあ。そんな」と言つて本心では満更でもないんじや。

「山田先生、ボコボコにしても構わない。・・・殺してくれ」

「文字変換間違つてますよ、先生！？」

「間違つてなどいない。私がそんなミスはしない」

いや、ミスであつてほしい！
でないと、いけませんつてばー！

「じゃ、じゃあ始めますね。斑鳩くん、エリを起動して下さー

「はい、わかりました」

「・・・が、頑張つて！」

「へへひひ、ファイト～」

かんぢやんたちの応援を受け、動搖を抑えて腰に付いていの懷中時計に意識を集中させて展開する。

「来い、
夜鳥」

俺の体は光に包まれた。

8 真（後書き）

・・・如何だつたでしょつか？

もつと書ければいいんですが、全くの力不足でして・・・すみません。

そして、おこがましいかも知れませんですが、誤字脱字がありまして報告していただければ幸いです。・・・感想もお願ひします。

9 翼（前書き）

今回も、シリアルなのが疑うくらいの薄い内容となっています。

また、アクセス数が3万を超えるました。皆さんのおかげです！！
ありがとうございます。

試験が終わり、ピットに戻っていた。

山田先生つて教師だけあって、強かつたよな。シールドエネルギーが残り1なんて、漫画で主人公がライバルとのバトルじゃないんだから。

「・・・斑鳩、凄かった」

「ぐりっち、強いね〜」

『氣づくとかんちゃんと本音が来ていた。

「・・・これ」

「お、すまない」

かんちゃんからタオルとスポーツドリンクを受け取り、汗を拭く。
ドリンクもキンキンに冷えていていい！

「せういえば、俺の実戦データ役に立つかな？かんちやんのとは戦闘スタイルが違うと思つたんだけど」

「へ、ひつと。参考になつた」

「ならいいが・・・なんか素つ気ないな。なんかあつたのか？」

「ー?」(アソブン)

かんちやんは首がむげるんじゃないから、くじらに左右に振つている。

「んな感じだつたつけ、かんちやんつて？」

「くわづち、データが取れたんだからー、かんちやんの機体、造つちやねうよー」

「お、なんだか今日は積極的だなあ。熱でもあるのか？」

「せうこつ田もあるんだよねえー、かんちやん

「う、うん。ある・・・と思つ?」

?つてなんだよー?自信ないのかよー

「乙女にはじめのうあるんだよーへろひは『氣にしない』

「本音、お前に乙女の心があるとは思えない自分がいるのだがどうすればいい?」

「そんな自分はショーレッダーにかけて細かくして、『み箱に捨てればいいよー』

さつげなく、怖い事を口にしてくるな!?今はその笑顔が鬼に見えるぞ。

「それはともかく、かんちゃんの機体、やつちやおつよー

「お、おお。着替えてくるから先に行つてくれ

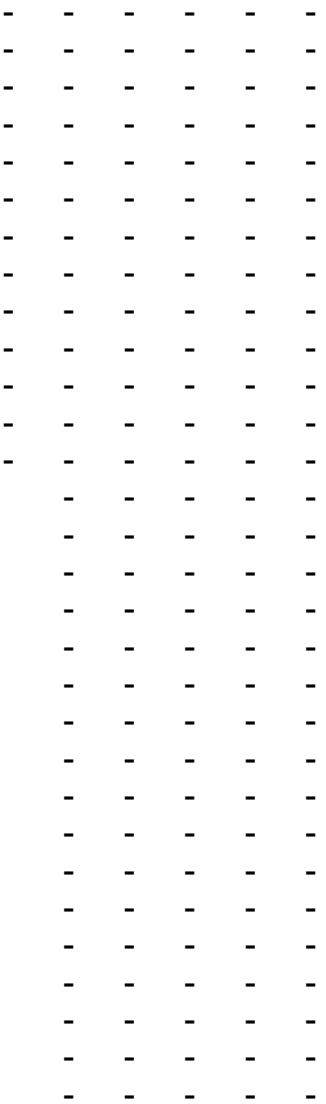
「・・・迷わない?」

「・・・」

「無理みたいだからー、待つてるよー」

「・・・すまん」

方向音痴が治ればいいんだがそう簡単には治らないみたいだし。
この方向音痴が治る薬を誰か作って下せー。涙を堪えながらロッ
カーに足を運ぶ。



「山田先生、大丈夫か？」

しかし、闘っている途中に心配になつた。あの強さはほつきり言つてしまえば、異常、危険だ。

「・・・・・」

私、山田真耶はつい先程まで試験官をしてしていました。
相手は黒翼斑鳩くん。ISを使える男の子として、このIS学園
に編入してきた生徒。見た目は暗い - - - ジャンケン、物静かな
子だと思っていた。IS操作も素晴らしいの一言に尽きる。なにか、
武道などをやっていたのだろうか。一つ一つの動きに無駄がない。
あの大人しさは獣が獲物を捕らえる前のような、そんな静さに似て
いる。

「ふうー、もう動けません」

「織斑先生。は、はい・・・大丈夫だと思います」

織斑先生も少し眉間にシワを寄せている。

織斑先生は昔の斑鳩を知っているのだからなにか知っているだろう。私も教師なのだから生徒の事をよく知りたい。

「織斑先生、彼は一体 - - -」

「山田先生」

私の言葉を遮るように言う。その言葉は重たく感じる。

「いくら教師でもあまり生徒の事に深く干渉するな。・・・その事は忘れないように」

「・・・はい」

返事をすると織斑先生は静に部屋を出て行き、部屋に沈黙が流れる。

それは試験中の静けさとは違っていた。

誰かこの状況をなんとかしてくれないかな？

「」

卷之三

山田先生にあこせつしようと探していたら、織斑先生との話を聞いてしまった。

後でにしようとしたのだが、織斑先生に見つかってしまいこんな気まずい事になってしまった。

「・・・黒翼」

「・・・何ですか?」

織斑先生の声はなんだかいつものよう凛とした感じはない。

「山田先生はお前の事を教師して気にかけているだけだ。だから、あまり気にするな・・・」

「成る程。・・・努力しますよ」

「そりゃ。ならいいんだが・・・」

織斑先生は少し口を緩ませて頷く。

「それでは俺、人を待たせているんで失礼します」

かんちゃん達が待つてゐるからな。早めに行かないといへン曲げたら大変だしな。

「あの、織斑先生」

「ん？」

「一応言つとります。・・・あ、ありがとうございます」「じゃいます」

「・・・ふん、せつせと行け。男があまり女子を待たせるなよ」

「では失礼します」

一礼して俺はかんちゃん達のもとに向かつた。

「くちゅっち、遅いね～。・・・あーもしかして、他の女の子に絡まれていたりしてー」

本音も心配そうな顔をして覗き込んでいる。

「・・・なんでも、ない」

「かんちゃん、どうしたのー？」

鬪つているときの斑鳩を見ていて寒気を感じた。斑鳩の鬪い方はとても効率的だった。
でも同時に不安になる。斑鳩と比べれば私なんか比べ物にならない。そう考えていると顔が自然に俯く。

「あ、そんな」と一斑鳩はしない！？・・・ハア！」

「フフッ。そんなのわかってるよ～」

思わず勢い良く顔を上げると、本音はしてやつたりと言わんばかりの顔で私を見る。

「何たつて、くひつちはかんちゃんの婚約者なんでしょうー」

「・・・うそ」

「なじか、くろつちの事信じてあげれば…やつじやなこと、私がく
るひがひつちがひつめー

・・・本音に教えられるなんて、私まだまだなのかな？

本音の言つ通りだ。私が斑鳩を信じてあげないといけないんだ。
やつじやなきや、婚約者失格だよね。

「本音、斑鳩は・・・渡さない」

「えー、共有はダメ?」

「絶対ダメ・・・」

「わかったよ~」

自然と笑いがこぼれてくる。

「すまないな、おそくなつた」

たわいもない話をしていたら、斑鳩がやってきた。

「・・・遅い」

「すまないって言つていいんだろ」

「臆として、くわいせーなにかを奢る」と一

「なにかつて何だよ?」

「・・・@カフュのパフェを

「パフェか。・・・わかったよ、いつかな」

「いつかっていつー」

「知らん、ほら行かないと時間がないんだから」

そういうと斑鳩は私の手を握り、引っ張る。その手はとても温かいものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6264y/>

インフィニットストラトス 忍ぶ臆病者

2012年1月14日16時53分発行